

公 園



夢遊星人

公園

林の中には世にも不思議な公園があって、不気味な程にもにこやかな、女や子供、男達散歩していて、僕に分らぬ言語を話し、僕に分らぬ感情を、表情していた。

——中原中也「在りし日の歌」

その公園のことを書こうと思う。どこから描いたらよいのか、なかなか書き出しが思いつかない。こんなとき小説家、あるいはメルヘン作者なら、どう書き出すであろうか。なにしろ書くことが実に平凡なのだ。単なる公園を、記憶に残るままに描きだそうというのだ。われながら、実にご苦労なことである。それでもその公園には“なにか”ありそうなのだ。その“なにか”は、何であるかは分からない。分からないから、それをひとつその“なにか”のひそんでいそうな背景なり、光景なりを、この公園のどこかに探してみようと思うのだ。そのためにまず、この公園そのものを、ある程度記憶に浮かぶかぎりをおおまかに描いてみようというのだ。そういうわけだから、まず最初の一語がほしいのだ。

一体こんな時はどう描き始めたらよいのか、画家なら眼に浮かんだ像を、その形のまま紙の上になぞるだろう。では形から始めればよいわけだ。その形なんだが……。

この公園がどんな形をしているのか、その辺が実のところすこぶる確かでない。どこから始めて、どこで終わって、その全体の形はどんなだか、丸だか、三角だか、ひし形だか、実際これまでそんなことはあまり考えたことがなかった。境界というものがすこぶる曖昧で、気がつく公園の中にいるし、また気がつく公園の外に出はずれている、といったあんばい。ただこの公園は、あとでもっとよく考えようと思うが、木々がやたらに多くて、その森のような木々が、だいたい周辺部をめぐっているのではないかと思われることだ。この木々のあるところは、場所によってだいぶ起伏がはげしい。時には切り通しのような場所もある。相当な急勾配の道と斜面が、いたるところにあるようだ。木々の間には建物も散見する。人家もあり、また公共建築物、というのは学校などもあるようなので、その辺が公園の境にちがいなからう。

形については別に空から見たわけではないから、だいたいこういう漠然とした印象から推す外はないのだが、やっぱり普通に円、あるいは長円と考えてよさそうだ。都会の公園のように、角ばったところはないようだ。いずれにしても、形などはどうでもよいではないか。だいたいこれまで考えてもみなかったことを、特にあらたまって詮索する必要があるだろうか。この公園について記憶していることだけを書けばよいので、あやふやな印象をいかにも断定的に決めつけるのは、この公園の性質からして望ましくない。

余計なおしゃべりが邪魔してしまったが、さてこの公園の周辺についてはどうあれ、中心に関してはかなりはっきりしたことが言える。つまり、真中には池があるのである。公園全体は、この池に対して、周囲から傾斜している一種すり鉢のような観がある。それは大ざっぱな印象で、池の三方向はかなり急な丘の斜面に連なっていくが、一端はゆるやかな芝地に接している。ほぼ円形をしたこの池には、晴れた休日などには貸しボートが浮かべられて、人出でにぎわう。人々はこの池のことを、単純にボート池と呼んでいる。

いま描写の便宜上、丘の頂の一つに自転車にでもまたがって、この光景を見下ろしているとしよう。丘の頂には何本も松の喬木が立ちならんでいて、その間を舗装した道がぬっている。道は急勾配をなして、丘の斜面をなだれおち、左へと池をへめぐって林の奥に消えている。自転車にまたがったまま佇立しているのは、ただ風景を眺めるためばかりではない。突然目の前に沈下した道の傾斜面に、言い知れぬ眩暈がひそんでいるためでもある。舗装されたその坂道ころがる車輪に、はたして魂がついていけるだろうか。眼は苦しげに、池のほうをさぐる。池にはボートが浮かび、青空を映した中をすべっていく。右手には青草の丘がゆるやかに起伏して、池の岸辺には、子供たちが、それとも小さく見える大人たちが、戯れたり、散策したりしている。そちらへ降りようか。それもかなりの冒険に思われる。なんだか丘を転がり下りる勢いのまま、ブレーキもかけられずに、池の中まで飛び込んでしまいそうなのだ。

そう考えている間にも、自転車はひとりでに前へのめり、いまにも転がりだしそうだ。こらえ

ようとしても、一向に抑えがきかない。いくらふんばってみても、自転車はずるずると草の丘を滑りだしていく。心臓は痛いくらいに緊張している。もうだめだ。いつの間にかハンドルから手を離して、体は曲芸のようにサドルの上にそりかえったまま、よたよたと自転車は転げだした。と思うと、二、三度よろめいて、バツタリと横倒しに倒れてしまった。乗り手はほうり出されて、丘の中腹に尻もちをついている。その横で、自転車の車輪だけがからからと回っている。

この辺の岸边は樹木も少なく、おおらかに芝草が波うっている。その草いきれは、休日の日光にむされて、妙に情欲的である。それは手入れの行き届かない、丈高い青草のせいにはちがいない。寝ころぶと、すっぽりその蔭に埋まってしまう。だが、この公園の情欲については、のちに語るとして、いま仮の位置としたxの丘からのぞむ展望を、なおも続けるとしよう。

池をめぐる左右の岸沿いには、松の木がそびえ、下生えの藪の間には、丸太を半分に分けたベンチが見えている。右手の林の方はずっと人の出があり、心なしか松林に射している陽光も、この公園の他のどの林よりも明るいようだ。それに対して、左手の林は木々の茂りにさしたる違いはないのに、なにやら鬱勃たる陰気を籠めているようで、人影もあまり見かけない。その印象の原因は、一つにはその方向が公園の北に当たるということの外に、思うにその林の奥にあるとある建物が、想像力に対してかもしだす暗示のせいであったかもしれない。その建物についても後述することにして、とにかく池の左手の方の林には、なにか言い知れぬ不安をかもし生物が、黒い翼の影を水辺に落としてでもいるような、心に寒々としたものが感じられたのである。

向かいの岸边には、貸しボートの小屋がぼつんと望まれ、そばにコンクリートの水門のようなものがある。そこをくぐりぬけた池の水は、小さな流れとなって、彼方の森の奥へ消えている。池へと貢いでいる細流の方は、こちら岸にあって、左手の丘すその道に沿って、日の光に閃々たる姿をおどらせている。休日の真昼の陽光を浴びて、緑の草のしとねに埋もれていると、子供たちのはしゃぐ声、尾長鳥の奇怪な鳴き声が、いつの間にか霧につつまれたように遠く聞こえ、眼に映る光景がうつつの世界か、それとも閉じ合わされた目蓋の裏に展開する幻の像なるか、いずれとも定かならない夢うつつにおちいる。それはそれとして、一幅の桃源図ではある。こんなふうな情緒と休息も、たまには公園の散策者におとずれる。

しかし、いまのところ語る必要があるのは公園の地理であって、事件や人物をデッサンする前に、まず書割りを仕上げておきたい。なぜなら、ある事件が“この”公園で起こったことであるかどうかは、それは一つにこの公園の地形、範囲、だいたいのディテールにかかっており、そればかりか、二つには“この”公園の地理を定めることによって、今後起こる事件の性質が、また影響されないとも限らないからである。奇妙なことを言うようだが、“この”世界には現在によって影響されない過去も、また未来もないのである。したがって、願わくばこの公園に関する記述が、単なる回想にとどまらずに、修復であり、同時に創造であらんことを。

さて、丘の上から、池をめぐる北の方へゆく道を見下ろすと、それは急峻なばかりでなく、なにやらメービウスの帯のように歪んで見えるのである。そこを一息に駆け下りると、どこやらただならぬ世界に踏みいってしまいそうな。だから目眩がし、下半身がちぢむ思いがし、足下に踏む大地がふるえだしたとしても、不思議はない。その曲線の底を、いましも車が一台、馳せてくるところである。それほどの距離に見えないのに、近づくにつれて、車の大きさはちぢんでいく。もう上り坂にかかってもいい頃なのに、反対に豆自動車のように小さくなって、なおも沈んでいくようだ。丘の背丈が突然伸びでもして、高峰の頂からハイウェイを見下ろすかのようだ。

こういう視覚の異常は、この公園では頻繁に起こるのである。おそらくこの公園自体が一つの完結した宇宙であるとすれば、こうした現象は相対論で説明できるのであろう。あるいは単に、目の生理的現象であるのかも知れない。そもそも、この世界は網膜のわずかな領域に、映し出されているに過ぎないのであるから。だから夜には逆に、小さな光るものが、眼に巨大化して映ってくるのである。いずれにしても、この公園が感覚に及ぼす影響は、ひととおりではないようだ。

昼間の公園は、こうした錯視を楽しませてくれるのだが、夜ともなるとそうはいかない。午後遅くなると、ザリガニ取りの子供も、ボートをこぐ少年たちも、散策する大人も、池の周辺から慌てたように姿を消す。人気のない公園に夕陽が射すと、心は早くも夜の中に沈みこんでいく。夜を愛する夢遊病者の世界が始まるのだ。夜の公園にとどまるのは、夜への情欲を抱く者たちだけである。

先ほども述べたように、公園の北の森の中には、不思議な館がある。昼間はだれも近寄らないが、夜になると館には燐光のような明かりが灯り、夜の蝶である夢遊者たちを惹きつける。噂

では、館には年齢の知れない美しい女が、一人暮らしている。館は閉鎖された博物館のようでもあるが、いつもホルマリンの匂いを漂わせているので、動物の剥製や昆虫の標本が連想された。ただ一人残った女は、未だにそれらの陳列品を守っているのである。

夜の森は、どんなに暗い夜でも薄明りが漂っていた。夜行動物には、夜は十分に明るいのであるが、この森では森自体が乳白色の微光を放っているようだった。その中を本能に引かれるままに彷徨っていくと、館がすぐ目の前に現われてくる。入口のホールはいつも開いたままで、ぼっかりと暗い口が訪問者を呑みこもうと待っている。見上げると、二階の窓ガラスに、燐光が灯っている。それは星や月を反射したものではないらしく、標本にされた昆虫たちの放つシグナルのように思われた。

この死の館に、男たちが惹かれてくるのは、女のため以外ではない。恐れつつも、抑えがたいエロスに誘われて、男たちはこの館の暗いホールに呑みこまれ、おそらくは二度と脱げることがない。一步踏み入ると、館の中は森と同じように、薄明りで満たされている。一階には図書室があって、朽ちた、ほとんど読みがたいほどに文字のかすれた書物が、書棚に詰めこまれている。中には、手で触れた途端に崩れてしまうものもある。書物でさえ、死んでいるのだ。広い階段を上って二階へでると、そこには標本室や、実験室のような部屋もある。標本室には、ピンで留められた無数の甲虫が、かえって生きて動き出すかのように黒々と光り、大小色とりどりの蝶類が、今にも飛び立ちそうに羽を広げている。かすかな腐敗の臭いの立ち籠めたその部屋には、長くは留められない。数限りない死が雄弁に語りかけてくるかのようである。

隣の実験室には、中央に大きな長方形のテーブルが置かれていて、周囲の壁には薬品類の入った戸棚が並んでいる。この深閑とした部屋で待っていると、やがてどこからかスリッパを引きずる音が近づいてくる。開けたままのドアから、一人の白衣の女が、両手に大きなガラス壺を捧げて入ってくる。壺の中には何か得体の知れないものが入っているのだが、はっきりと見定めることができない。その壺をテーブルの上に置き、女は訪問者の方を振り向き、にっこりと頬笑むのである。

壺の中身は、男との間のなにかの証しのようなようである。訪問者はそれから目を離すことが出来ずにいる。すると、もやもやとした塊が、晴れ上がって、そこに無数の昆虫が蠢いているのが見えてくる。蟻や蜘蛛や百足はもとより、見たこともない虫までがうごめく様が、ありありと眼に映るのである。標本にされた虫たちの魂であろうか。目を離そうとしても、そのイメージは目から離れようとしなない。すると、しだいに周囲の空間が広がって、おのれが部屋の中にいるのか、それとも壺の中にいるのか、判断が曖昧になってくる。昆虫たちの間に、ひときわ目立った紫色の夜の蝶が、その羽をこきざみに震わせている。そして、ふと空中に飛び上がる。その燐光を放つ飛跡を追って、男もまた羽を震わせて飛び立つ。狂ったように舞う紫の蛾を追って、男もまた乱舞する。暗い夜の空へと、二羽の翼を得た魂が飛翔する。そして、高く高く舞いつつ、ついには抱擁と交尾の心身をとろけさせる快樂の中に、男は喪心する。

昆虫館には、また新たな標本が加わったのだ。

(「公園」了)